

# 尖閣問題が映す 中国の論理と本音

東洋学園大学教授

朱建榮



## 尖閣諸島問題、こじれた原因は

——昨年、本格的な政権交代が実現して、鳩山民主党政権の下で日米関係がかなり迷走しました。2010年6月に菅政権が発足し、問題先送りではありましたが、日米間の緊張も一時的に収まりました。ところが、9月になって、尖閣沖での中国漁船と海上保安庁の巡視船の衝突事件が起きて、突如として日中関係が揺らいでいます。

この衝突事件を機に揺れる日中関係をどのような分析しておられますか。

朱 私 は、今回の事件に象徴される日中関係の最近のぎくしゃくした関係は、日本側の国内要因

として、民主党が初めて本格的に政権を取って、その中で外交に関して、今までの蓄積についての継承と理解が不十分だったことと、さまざまな問題の処理において熟練していないところがあつたのではないかと思っています。

大前研一さんが最近、尖閣諸島問題がこじれたことについて、民主党と自民党との比較で書いています。彼が言うには——もちろん当然、民主党も自民党も「尖閣は日本の領土だ」という立場で進めようとする点で、これは変わりはないんですけれども——、今までの自民党外交は「二枚舌」をうまく使ってきた。国内向けには、世論やさまざまな立場もあるので、「尖閣は日本の固有領土

で、問題は存在しない」と言う一方、外交的にはある程度の配慮をし、今まで暗黙の了解も重ねてきた。ところが民主党政権は、裏表が使い分けできない。

——そうですね。

**朱** 国際政治は正面から抗議して交渉できないこともたくさんあるわけです。そのことに対する十分な理解がないことと、政治主導がよい一面もあれば、機微に配慮するような外交交渉は、中国の事情を知り、今まで中国と長年の交流をもってきたプロである外交官の知恵が必要ですけれども、(民主党政権下では)その部分が発揮されていない一面があったのではないかと思うんですね。

——一言で言う、「外交のゲーム」になつてなかつたわけですか。まさに中国が戦略的思考をするのに対して、日本には戦略的思考がないと日本国民も思っているわけです。

ところが、今回に限って、中国が日本外交は方針転換したのではないかと受け止めたというのはなぜか。それはまさに普段の意思疎通がなかつた

ということでしょうか。

**朱** 大きな背景として、中国側は数年前に比べれば、かなり強い立場で出てくる、そういう一面があるように見えるんですね。その部分が日本国内では唐突に、あるいは高圧的に見えてしまうかもしれないんですが、実際は中国はここ数年、特に国際金融危機、その前後で世界における地位が明らかに上がって、欧米に対してもすでにそのような強い立場を示しているわけですね。

そういうことについて何を言いたいかというと、日本のあるアメリカ駐在の外交官が帰国して、1年ほど前にブリーフィングしてくれた話を、今思い出すんですけれども、アメリカでは中国外交の影響力がすごく大きくなっていることは、ワシントンにいればもうよく分かる。ところが、日本国内は依然として、古い認識で中国を見ているんですね。

——そうであるならば、中国側の方で、力の見せ方や周りへの配慮も含めて、そこも外交としてやらないと、相手に対する誤解は増えるわけです。

例えば今回、漁船の船長が、日本側でどう受け止められたかという点、「これは民兵に違いない」という説があるわけです。後ろに解放軍が必ずいて、やらせたんだと受け止めている人たちがいるわけです。それはなぜかと言うと、2009年以降、中国側の国際政治でのパフォーマンスが日本側から見ると強圧的だと思えるからです。

また、同じく2009年の地球温暖化に関連したCOP15のコペンハーゲンでの中国の対応、これは日本だけではなく、アメリカやフランスも含めて、「中国は強くなると、やはりこうなるんだ」と受け止められました。中国に対して欧米のメディアも含めて「中国は「ごう慢だ」と批判しましたが、またそういう態度が出てきているんだという受け止め方もあるわけです。

それともう一つ、日本側から言うと、中国人民解放軍の海軍の最近の行動を見ると、2010年4月、10隻の海洋艦隊が連ねて沖ノ鳥島まで来て演習をしたという事実があるわけです。そういうことも含めて、国民世論がなぜ敏感に反応してし

まうかという点、「そこには中国の何か見えない意図があるのではないか」と考えるのです。中国は長い時間的な視点から、20年、30年後をにらんで徐々に膨張している。そして、尖閣事件はそういう雰囲気がある中で起きた事件ということで、「これは戦略的意図があるんだ」と。例えば、南シナ海の問題も、関係各国、東南アジアの各国が中国と対立していますけれども、「ああいう形で既成事実化されるんじゃないか」と考えるわけです。中国が国際政治で、責任あるステークホルダーの地位を占めるということならば、中国自身が、よく考えていかないといけないと思うのですが。

### 日本側の問題点

朱 中国の話に入る前に、日本側の考え方、発想の違いという問題にも触れておきたいんですが、一つは、今回の事件で日本は最初から「どうもこれは解放軍が裏にいて、民兵が動いた」、というような判断はさっきおっしゃったように、中国の動きは全部、戦略的なものだと見ることがある。で

も、今度の事件は日本が中国の動きについて、10年、20年先まで考えた戦略を持ったものとしてあるものと、漁船の行動について、あまりにも簡単にリンケージしているんですね。

今のマスコミの報道、特にテレビが本当に問題だと感じるのは、どんな話でも、問題の両面に触れないといけないんですが、それがありません。特にテレビになると、一方的にある見方を示すために、複雑な事実をかいつままで、有利なものだけで結論に持っていくわけですね。そういうような話が積み重なって相手を見ると、結果的に判断を誤ることになります。

今回の事件が起きてから長い間、「中国の工作船ではないか」と言われていました。今、ビデオが公開されて、この船がまさにこうだと。しかし、それ以上の話は、今の両国関係を考えて言わなくなった。実は、これは船長が酔っぱらってやったことなんですね。酔っぱらってやったことと、軍や民兵とは何ら関係がないことですね。それが日本国内では「どうも中国の動きは絶対何か意図が

ある」というようなことになってしまう。

もう1点は日本国内の事情で、かつての自民党政権と今の民主党政権との違いではなく、バブル崩壊後、一般的に徐々に自信がなくなっていることです。さらに、今年は日中のGDP逆転が言われています。もちろん今、円高で、本当に逆転するかどうか分かりませんが、そうなると、やはり中国に対しての見方が複雑で感情的なものが入ってきて、それが余計、相手を悪い方向に解釈してしまうのですね。

## 転換点に来ている中国外交

朱 中国側の事情ですけれども、全般的に今の中国外交もちょうど一つの転換点に来ていると私は思うんです。鄧小平さんからは、特に1980年代、天安門事件の後、「韜光養晦とうこうようかい」という言葉があつて、言葉自体は、「鷹が爪を隠して、いつか強いつきになってまた見せる」という意味ですけれども、本当の意味は、外交とは先頭に立っているいろガンガンとやるのではなく、まあとぼけて、和

気あいあいと、それより国内の発展に没頭する、こういうのが本意なんですね。

いずれにせよ、今までの20、30年間は、外と対決せずに問題があっても、ある程度我慢してきたところが、ここ1、2年、中国の中で、このままでよいのかという気運が出てきて、今、中国の外交方針が数年前から、「韜晦路線は継続するけれども、言わなくてはならないことは積極的に言うべき」という表現もつけ加えられているんですね。その二つのバランスをどう取るかについて、今の中国外交に一定の揺れがあるように感じられます。それは事実です。

例えば、南シナ海に対して「核心利益」という表現をこの春に使ったんですね。「核心利益」という言葉は、今まで中国は主に台湾、チベットなどに使いました。それについては外国の方もある程度理解はして、この部分は中国の核心利益で、譲れないんだと、みる。

ところが、南シナ海に関しては、少なくとも今までの中国は、島や領海が自分のものであるとい

う主張であっても、紛争を棚上げにするとか、共同開発するということで、自分の主張ではない部分も容認してきたわけですね。それを「核心利益」という表現を使うと、すなわち「絶対に譲らない」というふうに、受け止められかねないメッセージがそこに出てくるわけです。

それで東南アジアもアメリカも警戒するのですが、「中国は『核心利益』を使ってきた。つまり、今までの政策を変えて譲らない、妥協しないと考えているのではないか」と米国防総省のゲイツ国防長官が受け止めているわけですね。そういう外の声がフィードバックされると、今の中国はこの表現をやめたんです。すでにアメリカ側に、この表現はもう使わないということを暗に伝えて、現実にもここ数カ月、おそらくこれからも当面は使わないんですね。

やはり、中国は強くなってきた、みんなもともと神経をとがらしているときに、中国のこういう慎重ではない表現、行動があると、余計、外の人

が恐怖感あるいは圧迫感を感じる。そういうこと

があるのは事実だと思います。

その一方で、中国外交はすでに拡張主義の方に行つて、高圧的に出てくるということを決めたとは思いません。第一、先ほどおっしゃった幾つかのことも、中国には先進国の立場と途上国としての立場の微妙さがあります。中国に言わせれば、コペンハーゲン会議で中国よりもっと強硬だったのはインドです。中国はむしろ、途上国と先進国の間のまとめ役を務めようとした。しかし、どうも問題の厳しさを乗り越えられず、結果的にどちら側からも——先進国から見れば、「中国ははつきりと何か示すことをしなかった」。中国が途上国をまとめようとして、中国が先に「こうする」と言ったら、ほかの途上国からは「あなたは裏切った」と言われたわけですね。そういう部分が一つあった。

——先ほど朱さんが、今、中国は国力も大きくなつてきて、まさに外交が転換点に来ている、また「韜光養晦」のことをおっしゃいました。実際、今、日本の中国研究者が注目しているのは、20

09年7月に全世界から大使を集めたときに胡锦涛さんが講話をして、「堅持韜光養晦、有所作為」という言葉を使つて言つた意味です。このことはまさに今までの中国外交の転換なんだ、そういうふうには理解する人が多いわけですね。

実際その後に、コペンハーゲン会議、あるいは沖ノ鳥島沖への10隻の艦隊の演習とか、「核心利益」という表現を使つたということなどから、より明確に、「下地はもうあるんだ。ある戦略意図で動き始めたんだ」という受け止め方がある。

その中で、いろんなトラブルがあると、「やはり中国は横暴だった」となる。例えばこの前のノーベル賞の劉暁波さんと奥さんに対する扱いは、日本も含めて、民主主義という価値観を持つている国からすると、「それは少し違う」と批判されます。それは決して不当な批判ではないと思います。中国が世界から容認される大国になるということであれば、そこは考えを改めなくてはいけない部分だと思います。そういう部分を考えると、まさに「下心があるんじゃないか」というのがまずあると

いうことで、今回の事件にもなった。それに権力内部の事情との関連はどうでしょうか。例えば2012年、習近平さんが次の党総書記になるでしょう。それに向けた人事をめぐる駆け引き、権力闘争が起きていて、そしてその中で胡錦濤主席――温家宝首相は対日融和外交を進めてきたけれども、それに対する反発、あるいは自分を有利な闘いに導こうとしている勢力の人たちから批判が出た。だから、逆に温家宝さんのパフォーマンスは、世論や、保守派の人たち、軍を後ろ盾にした人たちを意識して、日本により強く出ないといけないという状況に追い込まれていると見ていますが、どうですか。

**朱** 今までのような権力闘争説の図式で中国外交・内政を解釈することは、私は難しいと思います。ニューリーダーや、現指導部内の人、あるいは江沢民さんなど引退した人、私は割にそういうところは知っていますが、江沢民さんについては、1926年の生まれで、今84歳ですので、相当老衰して、上海で回想録を書いて、権力闘争と

かそういうのを仕掛けることは物理的にも不可能になったんですね。

## 政軍関係と南シナ海問題

――最後に伺いたいんですけども、先ほど、胡錦濤さんを筆頭とする指導部が軍を掌握できてないんじゃないかと指摘しましたが、一つの要因として軍との力関係があるのではないのでしょうか。また、今後、この巨大国家である中国が大国にふさわしい国際政治における地位を獲得していくためには、例えば南シナ海の問題は2国間ではなくて多国間で話し合うという、そういうトラックに乗せないとだめなんじゃないかと思いますが、いかがですか。

**朱** 今の中国指導部は、軍の行動については完全にコントロール下に置いていると、私は理解しています。つまり、どこかに勝手に軍が艦隊などを出すことはあり得ない。ただ、多様化が進む中で、先ほど言ったように、軍人が発言すると、これが外にちよっと誤ったメッセージになる。そう

いうところで、これから中国の軍の動き、あるいは政府と軍との関係が注目されていく、これは当然だと思っんですね。

外交も、今の「調整期間」はかなり続くと思うんです。第一の中国の問題は、ここまで大きくなって、今、世界から自分たちを公平に大国として扱ってほしいという願望があるということとは、これは分からなくもない。しかし、中国が大国にふさわしい、どのような行動をこれから取っていくのか、国際貢献をどうしていくのか、そのところは分からないし、外に見えてこない。

少なくとも、大きくなることは当然軍事力も伴うということ、周辺諸国へその脅威をアメリカなどがあおっても、中国としては、周辺諸国に安心・信頼される大国になっていくことが大事で、そのための努力が求められる。これは大国の宿命でもあるんですけれども、それについては確かに十分に応えていないと私は思います。

南シナ海のことについては、国際的に見て、領土問題を多国間で解決するという前例がないもの

ですから、常に2国間で交渉している。それが果たしてどこまで多国間となるか。アメリカが入るとすれば、ではロシアはどうなのか。こういう部分はおそらく中国も抵抗すると思いますが、日本としては、東南アジアがすべて一方的に中国に敵対しているということではないという理解が必要です。

実際に東南アジアは、日本より先に中国とFTAを結んでいるので、経済的には中国との関係がすでに日本以上になっています。ベトナムも含めて、中国と切っても切れない関係です。その一方で、隣の大国への心理的な恐怖感もあるので、ほかの大国を巻き込んでバランスを取る、そういう気持ちはあります。ただ単純に、東南アジアはみんな中国包囲圏をつくることに与よりたいというのとは違うと思います。

ただ、この南シナ海問題は中国外交の一つの試金石にもなるので、中国は内心で、間違いなくアメリカの介入を警戒しています。今の多くの中国の外交ゲームについて、日本の角度からだけでは

見えてこないのは、明らかに米中のゲームだからなのです。米中が協力するところもあれば、今後のための布石として競争するところもある。この二つこそ戦略的な国なんです。そこで駆け引きを出しているんですけども、中国にも最近、反省が出ています。というのは、どうもさまざまな問題の対応についてうっかりしていると、アメリカがいつの間にかどんどん入り込んできているということです。

例えば、北朝鮮と韓国との事件で、アメリカが韓国と密接に関係を持っている。この10年間、アメリカと韓国の間には溝があったのですが、最近はそのを一気に埋めて入ってきた。日本との関係では、今回の尖閣諸島問題をきっかけに日米の距離は近くなりました。そして東南アジアとの関係も同じです。そういうところで、まだ中国自身が反省すべきところがあるのではないか。そういうところも、中国外交はこれからも個々の問題の対処を通じて、試行錯誤しながら取り組んでいくしかないでしょう。

(2010年11月2日収録) 聞き手・本誌編集委員  
鈴木美勝

### 朱 建榮

しゅ けんえい

上海生まれ。1986年、総合研究開発機構の客員研究員として来日。学習院大学で政治学博士号を取得。東洋女子短期大学助教授を経て、現職。2007年ロンドン大学東洋アフリカ研究学院客員研究員。国際政治、中国現代史、日中関係などが専門。『毛沢東のベトナム戦争』『中国 第三の革命』『胡锦涛 対日戦略の本音』など著書・訳書多数。新著に『本当はどうなの? これからの中国』『中国で感謝される日本人たち』。